http://hokkaido-poland.com/pole.html

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第２３号　1993. 12. 15

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060 札幌市中央区南2東2
河合楽器製作所北海道支社内
電話 011-231-8661
FAX 011-221-4936

総会・懇親会開催される

北海道ポーランド文化協会が創立7年目を迎えることになった。去る十月十二日（火）にＫＫＲ札幌において第七回総会が四十名の出席者（他に委任状四十九通）を得て開催された。今村会長の挨拶ののち次の通り各議案が事務局より提案通り承認された。

一九九二年度事業報告

◇第一七回例会
講演会とビデオ映写「ポーランドの女たち」（HBC）安藤千鶴子さん
十月二十日（火）、札幌教育文化会館

◇第一八回例会
ポーランド映画特別上映会。「KRZYK（叫び）」B・サス、V・ズドルト作。十二月十九日（土）会場：シアターキノ

◇第一九回例会
講演会「現在のポーランド」北大スラブ研究センター教授伊東孝之氏、三月十三日（土）札幌国際交流プラザ

◇第二〇回例会
ポ文協コンサートⅡ（ピアノ・ジョイント・コンサート）ポーランドの代表的作曲家ショパン、シマノフスキ、パデレフスキ。八月二十日（金）ザ・ルーテル・ホール
演奏：（会員）高岡　美保さん、宮本　恵子さん、小野　由恵さん

《後援事業》
◇ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団札幌演奏会。十一月十七日（火）厚生年金会館
指揮：カジミール・コルド
ピアノ：遠藤郁子
主催：北海道新聞、北海道芸術鑑賞協会ほか

《ポーランド語講習会》
◇第十一期　九月～十一月
◇第十二期　二月～　四月
◇第十三期　五月～　七月

一九九二年度会計決算
（収入の部）

会費	五六一、〇〇〇円
その他	一、二九七円
繰越金	四九〇、二〇三円
合計	一、〇五二、五〇〇円

（支出の部）

事業費	二九三、〇一二円
連絡費	八六、六六六円
会合費	一三五、六六六円
事務費	七〇、三一三円
繰越金	四六六、八四三円
合計	一、〇五二、五〇〇円

一九九三年度事業計画

《主催事業》
映画会、講演会、音楽会などを例会として4回程度
ポーランド訪問（北海道・ポーランド文化交流事業として）

《後援事業》
音楽会、展覧会などなど適宜おこなう

《ポーランド語講習会》
年間三期程度実施

一九九三年度予算
（収入の部）

会費	五八〇、〇〇〇円
その他	二、〇〇〇円
繰越金	四六六、八四三円
合計	一、〇四八、八四三円

（支出の部）

事業費	三〇〇、〇〇〇円
連絡費	八〇、〇〇〇円
会合費	一二〇、〇〇〇円
事務費	一〇〇、〇〇〇円
予備費	一〇、〇〇〇円
繰越金	四三八、八四三円
合計	一、〇四八、八四三円

一九九三年度役員
会長：今村成和
副会長：遠藤道子、谷本一之
運営委員：安藤哲雄、安藤厚、市川恒樹、大竹貞、小林暁子、国田祐作、斎田道子、清水保子、霜田千代麿、中島洋、灰谷慶

三、長谷川洋行、本間富雄、吉野悦雄、和田完
監査委員：方波見雅夫、富山信夫
事務局長：吉田宏
事務局：
060 札幌市中央区南二条東二丁目
河合楽器製作所北海道支社内
ポ文協事務局（戸田長裕）、
電話：231-8661, FAX：221-4936
なお会則により役員の任期は2年である。

懇親会　総会終了後、高岡美保さんによる「ポーランド留学の6年」というお話と青山淳子さんによるショパン作曲バラード第3番のピアノ演奏があり、遠藤副会長の挨拶と乾杯で会食と懇談があり約二時間の楽しいひとときを過ごした。

絵の運命

國田　祐作

白テンをもつ婦人像

1483ころ　55×40.4cm　板
Cracow, Museum Crartoryski

一九九一年三月ワシントンを訪れたポーランドのワレサ大統領はブッシュ大統領とひとつの協定を結んだ。それは、コロンブスのアメリカ大陸の到達に因む「一四九二年回顧展」のためにポーランドから一枚の絵を貸し出す、というものであった。

一枚の絵というのは、クラクフのチャルトルィスキ美術館所蔵のレオナルド・ダ・ヴィンチ作「白貂を抱く婦人」のことである。この協定は美術館関係者に大きな衝撃を与えた。海外にこの絵が運び出されるのは初めてのことである。万一の事があったら、永久にこの作品は失われてしまう。そんな危惧をよそに、極めて政治的な判断によってこの絵は海を渡り、一九九一年十月から翌年一月までワシントンの国立美術館に飾られ、この展覧会で最大の注目を集めたのだった。この絵が無事クラクフに戻ってきたときの安堵は関係者だけでなく多くのポーランド人にとっても同じ思いだったろう。

どんな絵だってかけがえのないものだ。にも拘らず、レオナルドのこの絵は、その転変極まりない運命を見るにつけ特別に扱われるのに不思議はない。なぜならこの「婦人像」は何度も掠奪の危機に直面し、危うく行方不明の運命から救出されるという劇的な転変を辿ってきたからである。

私はこの八月、クラクフのチャルトルィスキ美術館を訪れて旧知のジグルスキ教授に会った。五年前ここでレオナルドの「婦人像」について教示をうけ、彼の研究論文を見せて貰ったのだった。今回はその訳本を届けることと、レオナルドの「婦人像」がどんな苛酷な道のりを歩んでクラクフに落ちついたのかを辿ってみることを目的にしていた。ジグルスキ教授からの紹介状を手にしてまずプワーヴィへ。

ワルシャワから列車で二時間ほどでプワーヴィに着く。レオナルドの「婦人像」がレンブラントやラファエロの作品と並んではじめて陳列されたのがこのプーワヴィの地であった。有力な貴族、アダム・カジミェシ・チャルトルィスキの妻イザベラがここに美術館を創設したのが一八〇九年、代々の館の敗地の一角に「緑の館」と呼ばれるゴチック風建築である。彼女の直接の動機は、一七九五年、ロシア、プロシャ、オーストリアによるポーランド分割でポーランドの国民的財宝が掠奪され散逸した運命を眼のあたりにして、独力で芸術作品や歴史的財宝の保護に乗り出したことであった。

実はプワーヴィのこの館には目ぼしいコレクションはない。クラクフに移管されて以来遺構を残すだけだからガイドをしてくれたヨランタさんも少々口惜しがっている。それでも、一八三〇年の最初の危機に話が及ぶと、熱が入ってくる。この年十一月、ロシアに対してワルシャワで

叛乱が起きた。戦火はプワーヴィに及びロシア軍の掠奪が予期されるとコレクションの分散がはじまった。歴史的古文書の数は夜陰ひそかに近くのヴィスク川を下ってワルシャワに運びこまれ、財宝・絵画の方は近くの農家の納屋や教会の壁に封じ込められた。レオナルドの絵もこうして無事だった。モヌケの殻のプワーヴィにやってきたツアーの軍隊は厳しい訊問で行方を探ろうとするが誰ひとり口を割るものはいなかった。管理人のひとりは拷問のために息絶えてしまったという。

レオナルドの絵の次の行先はパリである。イザベラの息子のアダム・イエジィはロシア皇帝から死刑の宣告を受けてパリに亡命し、ノーチル・ダム寺院の近く、サン・ルイ島のホテル・ランベールを購入して、ここにコレクションを移した。ここはポーランド亡命者のセンターになり、また忽ちパリ社交界の中心にもなった。シェンキェヴィッチやノルヴィドら作家・詩人も集まり、画家のドラクロワもショパンと連れ立ってやってくる。当時の舞踏会の情景はクフィアトコフスキの絵に描かれているが、そこにはショパンのピアノでポロネーズを踊る紳士淑女たちで溢れている。セーヌ川沿いのこのホテル・ランベールは持ち主も変わって静かなたたずまいではあるが、近くにキューリー夫人の住居があったり、ポーランド図書の専門店があって、ポーランドの雰囲気を感じさせる。本屋のショーウインドウを眺めている若い男女のカップルに声をかけたら、若い娘の方がポーランドから来た留学生であった。当時の目利き、早耳を誇るパリの美術新聞にただの一行もレオナルドの作品を報じていないところから、どうやらこれだけは誰にも見せず秘蔵していたらしい。

再びクラクフへ。レオナルドの「婦人像」は普仏戦争の戦火を逃れて故国クラクフに戻った。チャルトルィスキ美術館が創立されて全コレクションはここに収まったのである。一九三九年、最大の危機を迎えた。

この年九月、ナチス・ドイツのポーランド侵攻である。コレクションを一時避難させたヴァヴェル城にドイツ軍が乱入、手当たり次第に金貨・財宝を掠奪した。ヴァヴェル城の地下はクリプト（遺体安置室）になっているが、ここに隠したレオナルドの絵には目もくれず、土間に抛り投げて靴で踏みつけていった。画面の左上隅にある破損のあとはその時の傷である。

兵士たちの目からは逃れられても、ヒットラーやゲッペルスのような「美術愛好家」から逃れられない。この二人はめいめいの個人美術館を計画してレオナルドを奪い合ったのだが、直轄占領地総督のハンス・フランクが漁夫の利を占めて、クラクフ逃亡の際、彼はその絵と共にババリアの別荘に潜んでいたのである。

1945年、ドイツ降伏後ポーランドとアメリカの合同調査会はハンス・フランクの別荘から「婦人像」を発見した。ポーランド側のメンバーのひとりにチャルトルィスキ美術館のカロル・エストライヒャー教授がいた。ジグルスキ教授の若き日のお師匠さんである。

「彼はそれを見付けた時の興奮をよく私にくり返し語ったものだ。その絵がどんな運命をくぐり抜けてきたかに無知なアメリカ兵士たちがどんな扱いをするか、想像するだけでも耐えられなかったんだろう。この絵だけを自室のベッドの下に隠し一晩中守り続けたそうだ」と亡き師を振り返る。

カンジンの絵そのものに触れないままに紙幅が盡きてしまった。しかし、この絵を語る前にどうしてもその運命を考えないわけにはいかないのだ。そして、この絵のモデルは誰なのか、いつ描かれたのか、悪しき修復以前はどんな絵だったのか、まだハッキリした答は出ていない。何か言いたげなまま、ふと黙ってしまった口元の微かなほほえみを眺めていると、この若い女がほんとうにこのような人生を生きてきたように、深く心に沈んでいくのを感ずるのだ。

［ヴェソウィフ　シフィョント！］
クリスマス　おめでとう！

壊れ壜のミラーボール
――ポーランド随想

霜田千代麿

（一）三つの言葉

最初に僕が覚えたポーランド語は三つであった。その一つはワルシャワで草鞋を脱いだ時に世話になったポーランド人に、冗談混じりに教えてもらった“カラビン”は「空ビン」にあらず「鉄砲」の意味だという事と、“ジリフキ”が「尻ふき」では無く、「すもも」のことだという事、それからワルシャワ中央駅からウッジ駅に着いて、最初にキオスクで見つけて喜んで買った「トイレット・ペーパー」は、“パピアール・トワレトウベ”以上の三語がポーランドに於ける僕の原体験である。

その三つの品物はポーランドの歴史“戦争と平和”“光と影”の生活を象徴している言葉のように僕には思えた。

（二）留学前夜

テレビでポーランド映画をやっていた。ワイダの「灰とダイヤモンド」、カワレロビッチの「夜行列車」等々。

僕が初めてポーランドへ留学した1972年は札幌冬季オリンピックの年であった。奇しくも、その時の九十メートル級ジャンプ競技において、ポーランド人フォルトナ選手が111メートルを跳んで優勝した年である。これで、札幌の名前はポーランド社会主義人民共和国じゅうに知れ渡る事となった。オリンピックの賑やかなスキー競技の外に、僕が薄暗い茶の間の電灯の下で呼吸を殺す思いでテレビで見た最初のポーランド映画が「灰とダイヤモンド」と「夜行列車」であった。

モノクロ映画の醸しだす、けだるいような、スローテンポの流れ、それでいて異次元世界の一種緊迫した“何かアルモノ”を非常に緊張を通りこした恐怖の思いでみていた事を昨日のように思い出す。

勿論、息苦しさや緊張感は映画の内容とも関係があったが大方は一身上の理由、ポーランド留学が決定していたという事にあった。

異次元の世界「何か、アルモノ」とは僕にとっては「ポーランド社会主義人民共和国」全体を指していた。

映画のテーマがテロルであれ、何であれ、フィクションとは判っていても、その映画に出てくる全部が僕にとってはリアルタイムのポーランドであった。

それは、正に未知との遭遇と呼ぶに相応しいものであった。そして、強烈な印象とショックはポーランド留学を前にした僕自信の心にポジとネガとなり刻印された。

（三）ウッジ

イリューシンのプロペラ機で羽田を飛び立ちモスクワ経由でワルシャワに着き、しばらくワルシャワで草鞋を脱いでから、汽車でウッジに向かった。ウッジの駅を降りるとポプラか何か、高い木の上でカラスがガアガア何羽も鳴いていた。9月とはいえ、すっかり秋のたたずまいであった。

公園の角などいたる所に赤旗が何本も立っていた。最初、生理的に緊張感と恐怖感を覚えた。しかし、それもすぐに慣れた。電車も赤、バスも赤、ブロッワフ市の青い電車を見たときは本当に新鮮に感じた。

ウッジ大学附属、外国人の為のポーランド語学校は苦しかったけどたいへん楽しかった一年間であった。

最初の一カ月くらいは頭が痛くてまいった。朝八時過ぎから午後の四時半、五時頃迄、生まれてから、聴いた事もないワケのワカラナイ言葉での授業を受け、ラジオもポーランド語、何もかにもポーランド語、まったくチンプンカンプンであった。しかし、毎日毎日やられていると薄紙をはぐように少しづつ理解できるようになり、三カ月を過ぎたら買い物にいっても、指をささなくても言葉で「何をどれだけ下さい。」と言えるようになった。それから六カ月、一年一年半、二年、三年と少しづつ相手の言うことを理解し、こちらの考えも喋れる様になったのである。

ポーランドに日本の詩を紹介するまで

足達　和子

八月の初めにポーランドに輸出する事を目的とした『ふゆのさくら　現代日本名詩選』を国際文化出版社から上梓した。

思えば長い道のりで、きっかけは十六年前のこと当時私はワルシャワ大学の留学生だったが、アウシュヴィッツとヒロシマのテーマをからめた日ポ初の合作映画が撮影されていたのに通訳として参加していた。その中で日本の女優がアドリブで立原道造の「のちにおもいに」を口ずさみ、ポーランド語訳の字幕を作ることが必要になった。それが著名な詩人、タデウシ・シリーヴィャック氏の目に止まったのである。

それから四年間、すでに帰国していた日本で、「あなたは日本の詩をポーランドに紹介するのが天職だ」という手紙を受け取ることになった。私はそれを断り続けた。私は辞書の著者だったのだ。しかし、熱心な勧めについに説き伏せられ、やり始めたのが一九八二年、それから数えて十年目にこの本ができた。

途中からワルシャワ大学日本科のヴィスワフ・コタンスキ名誉教授に共訳をお願いすることになった。日本語のできるポーランド人とポーランド語のできる日本人が互いに補足し合い、翻訳することが、どうしても必要だった。その訳にシリーヴィャック氏が詩のトーンの点で手を加えている。

詩人と詩を選択したのは共訳者唯一の日本人である私で、明治初期のまだ文語体で詩を書いていた時代は除き、野口米次郎から高村光太郎、山村暮鳥、北原白秋、萩原朔太郎、三好達治、中野重治、草野心平、堀辰雄、中原中也など、日本で誰にでも知られている詩人百十三名、その代表作百九十七篇を採り入れた。

左頁に日本語の原詩を、右頁にポーランド語の訳詩を載せ、二カ国語版とした。ポーランドではワルシャワ大学に戦前からの伝統ある日本科があり、近年クラクフ大学、ポズナニ大学にも新設され、日本語を学ぶ学生たちが増えている。これは教材を提供する意味もある。

日本の詩がこれだけまとまった形で紹介されるのはポーランドでは初めてである。したがって日本の詩の歴史に関しては基本的な知識が無い一般読者に、古代から明治時代までの韻文の歴史、明治以降の近代詩史について詳しい解説を提供する必要があった。それに約八十頁とり、総頁数は五百八十五。ぶ厚い、美しい本になった。

出版部数は一万部である。日本では詩集は五百部とか、多くて三千部止まりなので、一万部と言うと目を丸くされてしまうが、しかし、ポーランド人はとても詩の好きな国民なのである。人口は四千万と日本の三分の一に過ぎないが、子供でもホーム・パーティなどで好きな詩人の詩をスラスラと暗唱したりするから、五万部刷っても恐らく一週間で売り切れることは間違いない。ただ、ポーランド経済の混乱から訳者自らが出版費用を全額負担しなくてはならなかった事情があり、一万冊に止めざるを得なかった。

この本は当初ポーランドの出版社からごく普通の国内出版物として出版される予定だった。しかし、ポーランドでは国から紙を受け取るのに五年、八年と待たされるのが普通で、当時その傾向が悪化の一途をたどっていた。十年、十二年と待たされるわけにはいかない。どうせそうするなら日本語の活字も使い、二カ国語版にしたいとの夢も生まれ、その場合、講談社国際室から利益を取らずに協力していただける約束もした。

しかしポーランドの混乱は進むばかりだった。結局、ほとんどの過程を日本でせざるを得なくなり、そうなると印刷費も製本費も日本の物価でかかってくる。ポーランドでの販売価格は一般のポーランド人が買える程度の値段にしなければならないから、つまり経費が売り上げ後の回収金ではまかなえない。全く採算のとれない出版物になったのである。

このような場合、少なくとも数百万のお金をあらかじめ作らなくては出版は不可能で、しかもその荷は日本人である私が背負う他ないことになる。

結果的にこの本は八百二十万円（直接経費のみ）必要とした。その費用の捻出は――。

まず全著作権者から、この事情を説明した上で、著作権無料の許可をいただいた。次にこの本の出版を、それに意義を感じてくれ、利益なしで引き受けてくれる出版社を見つけること。講談社系の国際文化出版社に引き受けていただけたのはとても幸運で、他にはもうこういうチャンスはなかったと思う。最後に費用を作るのに、公の基金に合格するように全力をあげた。

最終的には国際交流基金から百九十八万五千円、サントリー文化財団から百万円、セゾン文化財団から七十六万円、アメリカのパディレフスキ基金から五千ドル、計四百四十万円の援助を受けることができたが、三百八十万円が不足し、これは私の自己負担になっている。

翻訳はもともと、十年の勉強を必要とするものでありながら、日本では他のあらゆる職業に比べ、最も金銭的に恵まれない仕事である。それが英仏独などの主要言語でない、特殊語であればなおさらで、相手国が経済困難に陥っていたりすれば、それはもう言語に尽くせない窮状を強いられる。つまりこのような本がこういう国に紹介されるのには、翻訳者が（経済力の豊かな国の方の翻訳者が）霞を食って生きられるという誠にまれな人でない限り不可能で、そんな仙人に近いような性格の持ち主は各言語にひとりふたりしかいないはずだ。

最近新聞などで、「日本の翻訳一〇〇冊の会」というのが発足したと報じられた。日本文学を海外に広めるのに企業から協賛を募って翻訳者に援助金を出すとのことで、一件につき百万から三百万が支給されるとのこと。むろんとてもありがたいのだが、しかし企業が乗り出すのなら、どうして五百万円とか一千万円の単位でないのか。百万では翻訳者の一——最悪の状況と戦う翻訳者の負担のほんの一部しか埋められない。まだまだ翻訳者は貧乏でいいのだという考え方が残っている。また、どういう場合の、どの国の翻訳者が大変なのか、詳しい状況がまだ理解されていないように思われる。

社会が混乱した国と仕事をするには、この他にもさまざまな闘いを強いられる。郵便のやりとりひとつにしても、遅配あり紛失あり、あるいは電話の不通に悩まされ、事務能力の欠如に阻まれる。日本式のテンポではとうてい事を運ぶことはできず、そのためストレスがはなはだしい。神経がやられないように注意することまでが必要となってくるのである。

この本の場合、出版後もまだ苦労は終わっていない。配本を依頼した国営配本会社がやはり日本のようにはゆかないのである。ポーランドでは今、どこの職場でも移動が激しく、ここでも先の担当者がふいに辞めてしまった。すると他の社員たちはもう何も分からないので、社内機構や働く人のモラルが、退職するなら後任者にこの件を引き継ぐというようになっていない。手続きは目下、一からやり直し中で、出版後もう一カ月以上経っているというのに、いまだに横浜からの発送ができないでいる。

ポーランドでの販売価格もまだ決定されていない。というのも、ポーランドでは毎日のように物価が変動してしまい、そのため価格は本の到着後にやっと決められるからである。

それだけではない。ロシアの混乱までが加わった。輸送は当初からシベリア経由の予定で、船便も考えたが、それはそれで一難があった。したがってシベリア経由で送るとなるとロシアをことなく通過するのか：：。この本は最後の最後まで心配させられることの連続である。

こうなると、ここまで苦労して、なぜ翻訳者はそれでもやるのか、ということになる。それはこの本が末長く残るとの思い——。明治時代に初めて西洋の詩が日本に紹介されたときのことなどを思うからだ。利益の得られない仕事であればあるほど、決してゆるがせにはしなかった。訳はこれ以上推敲できないと思うまで繰り返した。そのため訳者同士が喧嘩になることもあったが、それでも後に残るものの質を落とさぬことを第一とした。だからこそ、五十年経ってもポーランド人はこの本を通して日本の詩を知るのだと思うのだ。それが翻訳者の唯一の喜び、密かな楽しみなのである。

足達和子出版リスト

音楽之友社
「贋作ショパンの手紙」
「ものがたりショパンコンクール」

共同通信社
「ぼくはナチにさらわれた」

講談社
「ガイドブック世界の民話」
「世界の昔話 上・下」
ワルシャワにて
「日ポ・ポ日小辞典」

編集委員から

昨年の日本翻訳出版文化賞を受賞した『ふゆのさくら』の著者である足達和子さんは、人づてに「北海道には同学の仲間が沢山いる」と聞いて、今回、当協会へお便り下さいました。「この本を皆さんに紹介していただければ：」との内容です。

『ふゆのさくら』は日本の新聞等でも取り上げられ、足立さんが本を贈呈したポーランド出身のローマ法王ヨハネ・パウロ二世や映画界の巨匠アンジェイ・ワイダ監督からも激励、絶賛の手紙をいただいたそうです。

購入をご希望の方は左記の足達さんの口座にお振り込み下さい。（国際文化出版社が講談社に吸収されてしまい、今はこの本の全責任が足達さんにあるため）

上製本で、一冊、八七五五円です。

振込先口座
さくら銀行ひばりヶ丘支店
（普）四〇五四八五九

連絡先
203 東京都東久留米市浅間町3-27-8
足達 和子 (0424)21-5820

「ポーレ」編集委員会
斎田道子・清水保子
吉田 宏
［連絡先］621-1738（斎田）

POLE 第 24 号（1993.12.15）目次

第 7 回総会・懇親会（1993.10.12）報告…… 1
國田祐作「絵の運命」…… 2
霜田千代磨「壊れ場のミラーボール～ポーランド随想」…… 4
足達和子「ポーランドに日本の詩を紹介するまで」…… 5